

## 梁啓超における「西学東漸」の構築について

### —『東藉月旦』を中心に—

張 淑 君

#### はじめに

梁啓超（一八七三—一九二九）は清末から民国初期にかけての人物で、政治家、啓蒙思想家、学者などとして活躍し、一八九八年の戊戌の変法の活動家として名を馳せた<sup>(1)</sup>。彼は晩年の自著『清代學術概論』において自分の学問に対して次のような評価を下した。「彼嘗て其女令嫻藝衡館日記に題する詩あり、曰へらく、『吾學の病は博を愛するにあり。是を用ひて淺且つ蕪なり。尤も病ひ恆なきにあり。獲るあれば諸を旋失す。百凡我を効す可きも、此二つ我を無となす如し、』と。自ら知るの明ありと謂ひつべし。」<sup>(2)</sup>このことから、梁啓超は大量の書籍を読んで、広範囲にわたる学問を修めたという一面が窺える。『時務報』の主筆を担当している時期、「幼学」を論述している文章で彼は「六門径書と曰ふ。（中略）啓超 本より郷人なり、憎く学を知らず、年十一にして坊間に遊び、張南皮の『輜軒語』『書目答問』を得、歸りて之を読み、始めて天地の間に学問と所謂学問なる者有るを知る。稍や長じて、南海康先生の門に遊び、『長興学記』を得、俯して孜孜として従事するなり。（南海先生に復た『桂学答問』有り、甲午 粵西に遊び桂

人学者に告げ、其の言『長興学記』に較ぶるに切近なりと為す。）歳甲午にして、餘 粵に学を授け、曾て『読書分月課程』を為して以て門人を訓へ、近く復た『読西書之法』を為して以て問者に答へ、皆師友の末説を演べ、心得有ること靡く、童蒙の求、辞さざる所のみ。」<sup>(3)</sup>と發表し、自分の経験に基づいて、読書の読み方に関する彼ならではの認識を披露した。其の後、門人などのために読書について彼は相次いで『西学書目表』と『東藉月旦』を著し、西洋学に関する書籍を紹介した。本稿では梁啓超のこれらの著作に着目し、その時代背景、創作意図、創作経緯、内容などに関する考察を通じて、梁啓超における西洋の学問とはどのようなものだったのか、西洋学に対する彼の理解は来日によつてどのように変化したのかを究明することを試みたい。

#### 一 『読書分月課程』

梁啓超における西洋学に対してどのような認識を持っていたかを理解するために、西洋学に関する彼の著作を確認する必要があると思

う。ここでは、『梁啓超年譜長編』を参考にして、各作品を編年順に以下のように表一にまとめた。

表一

一八九〇年	春、入京会試、下第、帰道上海、始購『瀛環志略』、接触上海製造局訳西書若干。八月、入康有為門。
一八九一年	康設教於万木草堂、治周、秦諸子及仏典等、亦涉獵清儒經濟書及訳本西籍等。
一八九三年	冬、講学東莞（癸巳冬至至甲午春之間）。
一八九四年	益読訳書、治算学、地理、歴史等。著『読書分月課程』。
一八九六年	七月『時務報』開、任撰述之役。著『変法通議』『西学書目表』等書。
一九〇二年	六月六日、七月五日『新民叢報』第九、十一号発表『東籍月旦』。

周知のように、梁啓超は十八歳（一八九〇）まで、中国の伝統的学問を学んできた。この際は、日本を含め外国に強い関心を持つことはなかった。その年、彼は科挙の試験に落第して故郷に帰る途中、『瀛環志略』を買ったことで、世界は五つの洲から成り、更に多くの国に分かれていることを知り、西洋学と接触し始めた。しかし、残念なことにお金が無かったために西洋学に関する本をあまり多く買うこと

はできなかった。その後、この年の八月、彼は康有為に謁見し、康氏の門下に入った。これをきっかけに、中国伝統の学問に限界を感じ、近代西洋及び明治日本の学問を視野に取り入れるようになった。一八九五年、彼が万木草堂を離れて北京に赴いたことにより、彼の学生時代は完全に終焉の時を迎えた<sup>(4)</sup>。

『読書分月課程』は梁啓超が初めて教師として東莞で講義を行った時期に自分の門人に読書の方法を教えるために著したものである。この著作は如何なる経緯によって書かれたか、その特徴は何か、また梁啓超はどのような意図を以てこの著作を著わしたかという疑問が浮かんだ。『読書分月課程』をより一層深く理解するために、まず、その執筆時期を検討していきたい。その執筆時期を確認するためには、梁啓超がいつ東莞で講義したかを把握する必要がある。その東莞で講義した経緯については、梁啓超自身が一八九七年『変法通義・論幼学』に言及している。

歳 甲午にして、餘 粵で授学し、曾て『読書分月課程』を為して以て門人を訓へる<sup>(5)</sup>。

他方、梁啓超の実弟梁啓勛は『曼殊室戊辰筆記』での兄の東莞での講義について以下のような記録を残している。

癸巳二月二十八日、思順 生まる。是の年の冬、東莞に於て講学す。番禺の韓雲臺と合ひて教へ、亦た万木草堂の弟子なり<sup>(6)</sup>。

ここでの「是年」は前後の内容をみると、梁啓超の長女梁令嫻が生まれた年であり、一八九三年を指すことが読み取れる。それゆえに、梁啓超の東莞で講義した時期については、この二か所の記録の間に不一致が生じる。これに対して、『梁啓超年譜長編』の編者は梁啓超は大体癸巳（一八九三年）の冬から甲午（一八九四年）の春までの間に東莞で講義を行ったと推測した<sup>(7)</sup>。以上のことを踏まえて、『読書分月課程』は一八九三年の冬から一八九四年の春までの間に作られたことが分かる。

『読書分月課程』がどのようにして作られたかについては、学界には以下の二つの説がある。

①『読書分月課程』は、南海先生の『長興学記』に基いて改編されたものである<sup>(8)</sup>。

②『読書分月課程』は梁啓超が一八九四年にその師である康有為の著作『桂学答問』に基いて作り上げたものである<sup>(9)</sup>。

また、夏曉虹氏は「梁啓超東莞講学考」において詳細な論考を行い『桂学答問』は『読書分月課程』の源であるという見方を示した。これはある程度李国俊氏の見方を証明した。また、『康有為学術著作選』の「點校説明」に編者は以下のような説明を加えた。

『桂学答問』は（中略）読書の順番及び読み方を示すために書かれたものである。（中略）『桂学答問』が刊行されてから、康有為は『なお学生たちは『桂学答問』の煩雑さと学問の範囲の広さ

を心配している』ことで、『我が門人梁啓超にその本の内容を抜き出して新学を理解するための抛り所とするよう言いませた。』と。梁氏は其の師の教えの下で「学要十五則」を作った。この文章は『桂学答問』と相補うものであり（後略）<sup>(10)</sup>。

以上のことから、『読書分月課程』は『桂学答問』に基づいて作られたと考えられる。

『読書分月課程』は主に「学要十五則」と「最初必読之書」と「読書次第表」という三つの部分から構成されている。「学要十五則」は主に学問を修める方法を説明し、読書の際の主な注意点を門人に教えるものである。特に、洋学書については、梁啓超も彼なりの考え方を以下のように示した。

西書を読むに、先ず『万国史記』を読み以て其の沿革を知り、次に『瀛環志略』を読み以て其の形勢を審らかにし、『列国歳計政要』を読み、以て其の富強の原を知り、『西国近事匯編』を読み以て其の近日の局を知る。格致各芸に至るに、自ら専門有り、此れ初学の為に説法し、瑣及せず<sup>(11)</sup>。

ここから、初学者に対して梁啓超が何冊かの洋学書を薦め、その読む順番や目的を明らかにしたことが分かる。何故当時の梁啓超はこれらの本を自分の門人に薦めたのかを解明するために、次に其の師康有為が門人に薦めた必読の洋学書を確認してみよう。

地志 宜しく先ず読むべし。瀛寰志略 其の訳音及び地 最も正しく、今 製造局書 皆本づく。海国図志 謬誤多く、従ふ可からず。余り英、法、俄、美国志の若き 皆な粗略なり。万国通鑑、万国史記、四裔年表一渉す可し。(中略) 一、政俗。列国歳計政要、西国近事彙編 最も詳し(後略) (12)。

上記の二つの資料を照合すると、梁啓超が『読書分月課程』に挙げた洋学書の多くはその師康有為が門人に薦めた書籍の一部に過ぎないことが確認できる。言い換えれば、梁啓超は初めて教師として講義した時に自分の学生に薦めた読書の書目、ひいては読書の方法はその師康有為から受けた教えに深く繋がっていると推測できるのではないだろうか。また、ここで挙げられた洋学書、例えば、『万国史記』『列国歳計政要』などには、欧米諸国のことだけではなく、日本に関する情報も含まれている。特に、『万国史記』は日本人岡本監輔氏により書かれたもので、各国の歴史を論述した史書である。このことから、梁啓超は万木草堂で勉強した際、欧米諸国についての西洋学の知識を身につけたほか、日本に関わることも洋学書を読むことを通して学び、日本への理解を深めたといっても過言ではなからう。

『読書分月課程』の第二部分は「最初応読之書」である。この部分では、梁啓超は「経学書」、「史学書」、「子学書」、「理学書」と「西学書」という五つの類から後進の学者たちにどのような本を読むべきか、どのような順番によって読書すべきかを詳しく説明した。その際、中国の伝統的な書物の分類方法(経、史、子、集)に加えて、「西学書」という類を追加している。ここから、梁啓超は万木草堂時代に、洋学書を

読んでいるにもかかわらず、完全には伝統的なことから離脱することができず、主に中国伝統の書物を読み、伝統の学問から多く影響を受けていることが読み取れるのである。

『読書分月課程』の第三部分は「読書次第表」である。この部分では、梁啓超は第二部分の解説を踏まえて、表を作って毎月の読書の方法や計画を具体化し、後進の学者たちが順調に学問を始めるハードルを低くしている。それゆえに、『読書分月課程』は梁啓超による読書の方法の創作であると考えられる。

確かに『読書分月課程』は形式上では其の師康有為の『桂学答問』と比べてあまり変化はなく、その師の教えを受け継いでいる<sup>(13)</sup>。他方、その師の『桂学答問』から優れた内容を抽出し、自分の読書の経験と合わせてよく練られた作品を作り上げたことに梁啓超の独自性が表れていると言っても過言ではない。梁啓超における洋学書の読み方に対する認識は彼自身の境遇に深く関わっていると思われる。他方、「旧学」(中国伝統の学問)を主流として、「西学」(洋学)を傍流とする『読書分月課程』の内容からは、当時の梁啓超は「西学東漸」に対して当時の士大夫の西洋学に対する認識(中学を体と為りて西学を用と為る)から強く影響を受けていることも窺える。それでは、東莞での教職を辞して『時務報』の主筆を担当していた時期に彼は「西学東漸」に対してどのような認識を持っていたのか。ここでは、この時期に著した『西学書目表』を検討してみたい。

## 二 『西学書目表』

表一を確認すると、一八九六年七月梁啓超は上海で黄遵憲、汪康年と共に『時務報』を創刊したことが分かる。その時期彼は『時務報』の主筆として活躍していて、一八九六年に洋学書の読み方及び目録表に関する『西学書目表』を出版した。この著作は『西学書目表』叙例、「西学書目表」（「西学書目表上」、「西学書目表中」、「西学書目表下」、「西学書目表附卷」四卷を含む）、「読西学書法」の三部から構成されている<sup>(14)</sup>。しかし、梁啓超の最初に出版された『飲氷室合集』には『西学書目表』は収録されていなかったため、最近までは簡単には見られないものであったが、二〇一八年に中国人民大学出版社より出版された湯志鈞編『梁啓超全集』には収録されているため、本稿はこれに所収した『西学書目表』を底本としている。また、許麗莉の研究によると、今日出版されている『西学書目表』には五つの版本があり、収録した本の数や識語の数などの面では各版本の間に多少のずれがある<sup>(15)</sup>。この著作は、当時の中国人が欧米諸国の地理、歴史、政治、科学技術に関する各分野の知識を摂取するための礎となり、まるで洪水のように西洋の知識が一気に中国に押し寄せた感じがあった。これらの書物が当時の中国人にどれほどの影響を与えたかは知る由もないが、少なくとも一部の知識人や青年志士はこれらの書物から啓発され、後の戊戌変法に関わっていくことになったと考えられる。

「叙例」では、梁啓超はまずこの著作の執筆動機を示した。つまり、自分の門人陳高第、梁作霖、黄公祐及び自分の実弟梁啓勳に読むべき洋学書を紹介し、これらの書籍の読み方などを説明するために執筆したことを述べた。続いて、文化の面においては、中国人は特に科学知識や思想などの面で窮屈な状況に陥っていることを指摘し、「中国は

自ら強くなろうとするならば、洋学書を数多く訳さなければならないし、学者は自立しようとするならば、数多くの洋学書を読まなければならない」という見解を明確に示した。最後に、梁啓超は訳書の分類、分類の基準、根拠と「書目表」の凡例について説明した。この書目表では中国の伝統的な分類方法（経、史、子、集）に依拠せず洋学書で「学」「政」「教」という三種類に分けている。梁氏は「教」に分類される書籍を除いて、「学」に分類される書籍を「書目表」の上巻に列挙し、「政」に分類される書籍を「書目表」の中巻に列挙し、雑類の書物を「書目表」の下巻に列挙し、明末清初に外国人の宣教師や当時中国の一部の訳書機関により翻訳された書籍を「書目表」の附巻に入れた。このような分類方法は現在の基準に照らしてみると、混乱していて、理屈に合わないところがあれば見受けられる。ただし、当時の中国においては、このような方法は伝統的な書物の分類方法（経、史、子、集）を打破した画期的なやり方であったのではない。また、梁啓超はこの時点で目録学における新たな第一歩を踏み出したと言えるだろう。そのほか、「学」と並列して「政」という種類の書籍を列挙することから、梁氏は技術の面を重んじるだけではなく、政治制度に対して非常に大きな関心を寄せた。これは万木草堂時期に「西学東漸」に対する認識——「中学為体西学為用（中学を体と為りて西学を用と為る）」よりさらに一歩進むのではなかろうか。

そして、梁啓超は「書目表」の書籍の分類方法を説明したうえで、各巻内に本の配列の基準、各種類の本の数の統計状況（例えば、中国の官立訳書機関が翻訳した書籍の中で兵学方面の本の数量が最も多かった。外国人や教会により翻訳した書籍の中で医学書の比率が一番



高いなど」を明らかにした。

最後に、梁啓超は「書目表」を編集する時の凡例（書籍の版本、値段、著者、訳者、符号など）を西洋の書目表に倣って作成し箇条書きにした。例えば、この書目表に列挙した書物について、梁啓超はこれらの書物を読むことによって、たくさん「識語」を入れ、その重要性などによって「○」をつけたりした。ここから梁啓超がこの書目表を作成するにあたっての読者への配慮が見てとれる。また、梁啓超は伝統的なやり方（著者を明記する）を採用せずに、著者の名前は明記しないで、訳者の名前を明記する新しい方法を採用した。この点から、梁啓超は洋学書を重んじて、特にその翻訳を重視する考え方が多少なりとも窺えるのではないだろうか。また、当時の欧米諸国（日本を含む）の図書目録と照らし合わせると、梁啓超がこの書目表を作成したとき、西洋のやり方から影響を受けたことも推測される。

「西学書目表中」と「西学書目表附巻」に列挙した書籍を参照すると、これらの書物は欧米諸国の書籍を訳したものの比率が最も高いにしても、日本の書籍も訳したことが分かる<sup>(16)</sup>。万木草堂時代と比べて、梁啓超が読み終えた日本に関する洋学書の数量の増加からみると、『西学書目表』を作成した際の梁啓超は洋学を直接受容することから、日本を経由して西学の知識を勉強するという方針転換も読み取れる。

「読西学書法」を検討すると、梁啓超はこれらの書籍に対する自身の見方を示し、また、各書籍を読むときの注意点なども詳しく説明していることが分かる。さらに、中国の学者に西洋学の知識を勉強することを提唱しているだけではなく、中国伝統の学問の勉強も無視でき

ないことを強調した<sup>(17)</sup>。

表二

桂行軍測繪、水師操練、陸師操練、防海新論、御風要術、克虜伯炮	瀛寰志略、海國圖志、英、法、俄、美国志、万国公	法	列國歲計政要、西國近事彙編、西國學校論略、德國議院章程、西事類編、西俗	談天、地理淺識、天文圖記、中西紀事、中西閥	學問
說、炮操、法、炮表、海戰紀要、兵船布陣	通鑑、万国法、史記、四裔星、年表、日本、經、日本、新政考。	掌	雜誌、普法戰紀、鐵軌道里。使西、學、有西學大、成輯之。有全、體新論、化學、養生論、格致、英法義比四國日、記、使東事略。	編。	西學
學海戰紀要、兵船布陣	る	す	西國學校論略を除いて全部ある	化学養生論を除いて全部ある	書目
表全部ある	る	あ	る	る	表

それでは、梁啓超はなぜ『西学書目表』にこれらの書物を列挙したのだろうか。これらの書物は何に由来するのであろうか。まず、筆者が『桂学答問』に列挙した書籍と『西学書目表』に列挙した書籍を比較してその結果を表二にした。

表二から、『西学書目表』に記載された書目は康有為が『桂学答問』に若者のために列挙した西洋学に関する本をほぼすべて含んでいることが分かる。このことから、梁啓超が『西学書目表』を作成するにあたって康有為の『桂学答問』に依拠した可能性が高いと考えられる。本稿第一節で述べた『読書分月課程』と比較すると、『西学書目表』は、附巻に列挙した中国人の手になる洋学書以外に、洋学書の訳本を中心として論述した著作であり、洋学書の読み方などについても一層詳しく述べられている。ここから、『西学書目表』を執筆するにあたり、直接欧米諸国を手本として、欧米の技術だけではなく、政治体制等の面にも強い関心を持って積極的に中国に導入しようとしていた梁啓超ならではの「西学東漸」に対する認識も窺えるであろう。また、洋学書を読むために日本を経由して書籍を入手するのも一つのルートになつてはいたが、梁啓超は心の中ではそれはあくまでも傍流であつて主流ではないという認識を持っていたことも明白である。

### 三 『東籍月旦』

『東籍月旦』は戊戌変法の失敗により日本に逃亡した梁啓超が一九〇二年に、これから「東籍」（日本の書籍）を学ぼうとする中国人読者

に向けて著した倫理分野と史学書分野の二章から成る、日本人の評論とは異なる中国人ならではの視点から検討し評論を加えたものであり、最初は『新民叢報』第九号、第十一号（一九〇二年六月六日、七月五日）に載せられたものである。ただし、この『東籍月旦』は上述の二章だけ執筆され、しかも、第二章は未完のままで終わった。この点について、梁啓超の「致徐佛蘇書」という書簡に、以下のように書かれている。

わたくしは日本の各種の書籍を批評しようと思っているが、その前私は『新民叢報』に『東籍月旦』を発表したものの、その後連載を続けられなかった。今連載を再開する。…もしこの書が完成したら、後進の学者に大役立つかであろう<sup>(18)</sup>。

そこで、梁啓超は一九〇七年に『東籍月旦』を続けて連載する計画を立てたが、結局できなかったことが分かった。梁啓超は叙論でまず「中国においては英語を学び英語が通じる人は数千人もいるが、嚴又陵を除いてかつて他に一人としてその學術思想を中国に輸入したものはなかった」<sup>(19)</sup>と賞賛した。「然して概ね我學界の現在の結果を計るに、西学を治む者の收効、転学を聳者に治むに及ぶ能はざる若きなるは何ぞや。その故に二有り。（一）西学を治む者…本国の学問に於ては、一つとして知る所無きこと甚だしき者或は文字を並べて解さず…（二）西文の政治・経済・哲学等の書を読まんと欲すに由り…最も速くして五・六年の功非ざるは十餘年も可ならず」<sup>(20)</sup>として、言葉の点からいえば直接西洋語を勉強して洋学書を読むというより、中

国と同じように漢字を使う日本語を勉強して日本語に訳された洋学書を読むことで西洋学の知識を勉強するほうが、より効率的であると梁啓超が主張した。中国においては日本語を使って書籍が読める人数が増加しつつあることなど、当時の中国の実情を踏まえて、梁啓超は日本語の書籍を中国人に紹介する『東籍月旦』を作成することにしたのである。

『東籍月旦』の第一編は「普通学」といい、第一章の「倫理学」<sup>(21)</sup>と第二章の「歴史」<sup>(22)</sup>から構成される。日本文部省の「普通学」についての説明の部分から、「地理」、「数学」、「博物」、「物理」、「化学」、「法制」と「経済」なども含まれていることが分かる。このことから、梁啓超はこれらについても日本語の書籍を紹介する計画があったことが推測される。ここで挙げられている書籍は、いずれも西洋学の知識を勉強するための入門書として妥当であると梁啓超が考えていたものである。また、彼は普通学は凡そ学を求めんとする者にとつていかなる勉強の方式を使っても勉強しなければならないものであると指摘し、普通学の重要性を強調した。その後、日本の現行の中学校の普通科目を列挙した。それらの情報をまとめて、中国の学生の実際状況を考慮した上で、各科目を勉強するときの注意点を明確に示した。ここでは、明治期の日本の中学校の科目について、表三にして提示する<sup>(23)</sup>。

表三を確認したところ、日本の学制や教育令などの規定によつて、日本の小中学校はいずれも普通学を授ける場所であり、日本においては普通学は学生の勉強の第一歩であり、基礎の中の基礎とされていることが分かる。しかし、当時の中国人の学者はただ四書五経を勉強し伝統の教養を身につけていただけで、日本の「普通学」については、

表三

明治三十 四年三月 五日	中学校ノ学科科目ハ修身、国語及漢文、外国語、歴史、地理、数学、博物、物理及化学、法制及経済、図画、唱歌、体操トス。外国語ハ英語、独語又ハ仏語トス。法制及経済、唱歌ハ当分之ヲ欠クコトヲ得。
明治十九 年六月二 十二日	尋常中学校ノ学科ハ倫理国語漢文第一外国語第二外国語農業地理歴史数学博物物理化学習字図画唱歌及体操トス第一外国語ハ通常英語トシ第二外国語ハ通常独語若クハ仏語トス但第二外国語ト農業トハ其一ヲ欠クコトヲ得又唱歌ハ当分之ヲ欠クモ妨ケナシ。
明治十二 年九月二 十九日	小学校ハ普通教育ヲ児童ニ授クル所ニシテ其学科ヲ読書習字算術歴史修身等ノ初歩トス土地ノ情況ニ随ヒテ野画唱歌体操等ヲ加ヘ又物理生理博物等大意ヲ加フ殊ニ女子ノ為ニハ裁縫ナドヲノ科ヲ設クヘシ。
明治五年 八月三日	下等中学教科ニ国語学、二数学、三習字、四地学、五史学、六外国語学、七理学、八画学、九古言学、十幾何学、十一記簿学、十二博物学、十三化学、十四修身学、十五測量学、十六奏楽 当分欠ク。 上等中学教科ニ国語学、二数学、三習字、四外国語学、五理学、六野画、七古言学、八幾何代数学、九記簿学、十化学、十一修身学、十二測量学、十三経済学、十四重学、十五動植地質鉱山学、十六奏楽 当分欠ク。



基本的な知識すら持っていなかった。それゆえに、梁啓超が普通学の勉強を強調したのは驚くべきことではない。

また、梁啓超は日本の中学校の課程をそのまま列挙したのであるか、或いは日本の中等教育をよく調べて検討したうえで『東籬月旦』を書き上げたのであろうか。『東籬月旦』に梁啓超が列挙した日本現行の中学校普通科目と表三と照らし合わせると、梁氏が提示した「倫理」は明治三十四年の文部省の規定では「修身」に変わり、「習字」は明治三十四年の文部省の規定では削除されたという変化が明白である。また、文部省の他の年代の規定と合わせてみると、それぞれに提示した中学校の科目と梁啓超が『東籬月旦』に挙げた科目とは少しずれがあることも窺える。それゆえに、梁啓超は『東籬月旦』を作ったとき、日本の当時の最新の中学校の科目をそのまま写し、日本の中等教育に対する理解が表面的なものだけに留まらず、中等教育の科目の各段階の規定と比較検討して、自分の手を加え、中国の実情を踏まえたうえで、その評論文を書き上げたと考えられるのではない。

第一章の倫理学については、「中国は礼儀の國と自称し、倫理学については外国から求める必要はないと思っているが、しかしこの考えは間違っている。中国のいわゆる倫理は範圍がせまく、学問をすべて含んでいるとは言えない」<sup>(24)</sup>と述べて伝統的な中国の倫理学を強く批判し、「東学」を勉強しようとする中国人に当時の日本文部省が設定した中等学校倫理道德教育要領の概要を紹介した。日本文部省が一九〇二年二月六日に制定した「中学校教授要目」の内容<sup>(25)</sup>と比較してみると、この部分では梁啓超は確かに文部省の規定をそのまま翻訳して採用しつつも、中国の学者の倫理学に関する間違った認識を修正し、

日本の中等教育の最新の政策を中国に輸入した。ただし、唯一一致しない点は、『東籬月旦』で梁啓超が挙げた部分が中学四年・五年生に対する教授要目であるのに対して、文部省の布告ではこの部分は中学三年・四年生に対するものだったという点である。『東籬月旦』で梁啓超の指摘した日本文部省が發布した最新の訓令の時間（一九〇二年二月六日）と『東籬月旦』の作成時期（一九〇二年六月～七月）とを照らし合わせてみると、ここは梁啓超の書き間違えである可能性が高いと考えられる。それにしても、梁啓超の倫理学に関する書籍の紹介はちやうど学校制度を整備して研究機関などを設立したばかりの中国にとつて大いに役に立ち、参考になったであろうことは言うまでもないことである。

そして、西洋の倫理学の分野の書籍を中国に紹介しただけではなく、日本人が使用してきた各種類の教科書や研究の役に立つ訳書や著作を列挙し、各書籍のメリットとデメリットを詳細に書き記した。特に、『中等教育倫理講話』については、各章の概要をまとめて詳しく説明した。また、中には上海広智書局によって翻訳された書籍も何冊があることも表記した。上海広智書局は梁啓超が主導し、訳書を出版して、康・梁一派の政治思想や主張を宣伝した組織であるから、上記のような詳しい評論をつけたのは当然のことであるのだろうか。これも梁啓超が日本の中等教育に対して詳しく研究し、深く理解していた証であると言える。

第二章の歴史については、梁啓超は最初に「歴史者、普通学中最重要者也（中略）慾治政治、經濟、法律諸学者、則歴史為尤要。（歴史は普通学の中で最も重要である（中略）政治、經濟、法律の研究者には、

歴史学が最も重要である」という見方を示し、歴史学はただ歴史の研究に留まらず、ほかの学問の基礎でもあるとその重要性を強調した。

続いて、梁啓超は歴史書を世界史、東洋史、日本史、泰西史など八種類に分けているが、ここでは、普通学の一つとして、世界史、東洋史と日本史の三つを主に論じている。そのなかで、梁啓超が紹介した書籍は、世界史は三十一種、東洋史は十三種、日本史は八種であることから、梁啓超は特に西洋史に重点を置いたことが分かる。

世界史の書籍を検討すると、日本人の世界史はほぼ西洋史に相当するものであり、本当の意味での世界史に関する書籍は少ないことが窺える。また、梁啓超は本を紹介する際に、古代史に始まり近代史に至る順番で書籍を扱い、基礎的で読みやすい本から並ぶように工夫したことも知られる。

東洋史については、梁啓超は日本人における東洋はアジアを指している、東洋史は実は中国の歴史を指していると指摘した。この中で、梁啓超は高桑氏による『東洋史』は中国とインドを中心にして、他国を含めて紹介したことで東洋史の第一級の書であると賞賛した。

日本史については、梁啓超が関心を寄せているのは日本の幕末と明治時代の歴史である。それはなぜかという点、幕末は日本を近代化へと導いた時期であり、明治は西洋の進んだ文化を取り入れつつ近代化を進めた時期である。中国人がこれらの書籍を読むことで、中国の近代化に役立つと梁啓超は考えた。そのほか、『東籍月旦』に言及した書籍の一部はその来日前に作成した『西学書目表』に列挙した本と重複するものがあるが(例えば、『万国史記』)、その評価に少しずれがあることを見ると、梁啓超は日本に亡命して、たくさんの書籍を読んだ後、

日本への理解ひいては西洋学への理解を深めたことが関係しているであろうか。これらの歴史書籍の一部は、維新派の宣伝を担った広智書局によって翻訳された。梁啓超が自分の政治思想を自国民に伝え自国民を啓発しようとしていた姿も見えてとれると考えられる。

以上を踏まえると、『読書分月課程』と『西学書目表』において、梁啓超は西洋学を直接中国人に紹介するという姿勢であったのに対して、『東籍月旦』において日本経由で西洋学を勉強するという姿勢に転換したことが窺える。また、日本語の書籍を中国人に紹介すると同時に、中国近代教育制度の確立の模範となるように日本の中高等教育における最新の制度を中国に紹介し、ひいては教育を通じて国民の思想を改造し中国を救おうとする梁啓超の思惑も見えてくるのではないか<sup>(26)</sup>。このような変換はある程度当時梁啓超の日本に亡命する境遇と当時の時代の流れとつながっていると考えられる。

### おわりに

本稿では梁啓超の洋学書の読み方に関する三部の著作を検討することを通じて、梁啓超の「西学東漸」に対する認識の変遷や目録学に対する認識の変化について考察を加えた。その結果、これらの変化に潜んでいる梁啓超における「西学東漸」の構築の過程、ひいてはこれらの変化に込められた彼の政治理想の変遷も漸く明白になった。

初めに、『読書分月課程』で梁啓超が紹介した書籍の中では、中国の古典籍が占める比率が高いのに対して、洋学書の比率はかなり低い。

次に、『西学書目表』の場合は、洋学書が占める比率が高いが、中国人により翻訳された書籍も一定の分量を占めている。日本滞在期に著わした『東籬月旦』の場合、主に日本人が訳した洋学書と日本人が著した書籍から構成されている。このような時代の流れに伴って、自身の境遇や思想も変化し、後学の徒に対して指南書としての洋学書と中国伝統の書籍がそれぞれ占める比率も変化してきた。こういった変化は梁啓超の「西学東漸」に対する認識の変化とも言えよう。万木草堂時代から日本亡命期まで「西学東漸」に対して、「ヨーロッパから出発し日本を経由して中国に行く」という「西学東漸」のもう一つの道筋が梁啓超の心の中に貫かれていたのではなからうか。また、梁啓超は西洋学に対して、「中学為体西学為用（中学を体とし、西学を用とす）」という思想から、変法維新を通じて国を救う、国民の思想を改造して自己救済するに至るまでの認識の変化の様相も見えてとれる<sup>(27)</sup>。それゆえに、恐らく梁啓超はこのような一連の著作を国民に紹介したのも彼自分の政治理想を実現する一つの通路であったと考えられる。

## 注

(1) 徳富蘇峰「梁啓超君の清代學術概論」『野史亭独語』、民友社、一九二六年、一六八―一八四頁。「梁君は縦横の策士である。又た曾て革命的運動家であった。時としては、外国に於ける逃竄の浪人者たり。時としては、自国に於ける内閣の閣員たり。其の一生の変化は、浮沈出没繋がる舟に似てゐるが、然も究極するに、梁君は天成新聞記者だ。梁君にして若し他の野心を抛

擲し、新聞記者として立たば、東洋唯一の大記者と言はざる迄も、その級中の或位を占むるに難からぬであらう。…併し梁君は、要するに新聞記者だ。哲學家でもなければ、思想家でもない。云はば理想と、現実との境目に跨りて、一世の輿論を鼓吹するの天職を有する一人だ。同君にして若し小策士の常套を脱し、其の雄健無比の筆を、東亜興隆の為に献げなば、其の收穫は、決して支那党争史の一二頁を贏ち得るの比ではあるまい。」を参照。

(2) 梁啓超著、渡辺秀方訳「梁啓超、其の二」『清代學術概論』、読画書院、一九二二年、一六九頁）を引用。中国語の原文は「彼常有詩題其女令嫻芸薈館日記云、『吾学病愛博、是用浅且蕪。尤病在無恒、有獲旋失諸。百凡可效我、此二無我如』可謂有自知之明。」（梁啓超、『清代學術概論』（中国學術史第五種）、商務印書館、一九二三年、一四九頁）とある。

(3) 梁啓超著、湯志鈞編「変法通義・論学校五 幼学」『梁啓超全集』第一集 論著一、中国人民大学出版社、二〇一八年、六六頁）「六日門徑書。（中略）啓超本郷人、懵不知学、年十一游坊間、得張南皮之『輜軒語』『書目答問』、帰而誦之、始知天地間有所謂学問者。稍長、游南海康先生之門、得『長興學記』、俯焉孜孜從事焉。（南海先生復有『桂学答問』、甲午游粵西告桂人學者、其言較『長興學記』為切近。）歲甲午、餘授学於粵、曾為『読書分月課程』以訓門人、近復為『読西書之法』以答問者、皆演師友末説、靡有心得、童蒙之求、所弗辞耳。」を参照。

(4) 丁文江、趙豊田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社、一九八

三年)を参照。

(5) 前掲注(3)を参照。

(6) 注(4)前掲書(三十頁)に「癸巳二月二十八日、思順生。是年冬、講学於東莞。余番禺韓雲台台教、亦万木草堂弟子也。」とある。

(7) 前掲注(6)を参照。また、夏曉虹氏は「梁啓超東莞講学考」(『中国文化』第五十一期、二〇二〇年)で詳細な考証を通じて「以上の考論已足以可証明、梁啓超的『読書分月課程』確實源出康有為的『桂学答問』、写作時間乃在東莞講学之後。(以上の考察と論考は、梁啓超の『読書分月課程』は確かに康有為の『桂学答問』を源として、その作成時間が彼が東莞で講学した後であることを十分に証明できる。)」ということを証明し、李国俊の見方を賛成した。

(8) 注(4)前掲書(三十頁)「至於『読書分月課程』一書、是根据南海先生『長興学記』改編的。」を参照。

(9) 李国俊『梁啓超著述系年』(復旦大学出版社、一九八六年)を参照。

(10) 樓宇烈『康有為學術著作選 長興学記 桂学答問 万木草堂口説』(中華書局、一九八八年、點校説明)「桂学答問(中略)為述読書の次第及方法而成此書。(中略)桂学答問刊出後、康有為『尚慮学者疑其繁博』、於是『属門人梁啓超、抽繹其条、以為新学知道之助』。梁氏遵囑作学要十五則。此文是與桂学答問相輔之篇(後略)」を参照。

(11) 注(3)前掲書(第一集 論著一、十三頁)「読西書、先読『万

国史記』以知其沿革、次読『瀛環志略』以審其形勢、読『列国歳計政要』、以知其富強之原、読『西国近事匯編』以知其近日之局。至於格致各芸、自有專門、此為初学説法、不瑣及矣」を参照。

(12) 注(10)前掲書(三八頁〜三九頁)を参照。

(13) 錢穆『近百年來諸儒論読書』(『錢穆四先生全集』、聯經出版事業股份有限公司、一九九八年、「学論」、一三八頁)「似乎有意无意地模仿着有名的程氏家塾『読書分年日程』而来」を参照。

(14) 注(3)前掲書(第一集 論著一、一三三頁)「餘既爲『西書提要』、缺医学、兵政兩門、未成、而門人陳高第、梁作霖、黄公祐、家弟梁啓勳以書問応読之西書、及其読法先後之序、乃為表四卷、劄記一卷示之」を参照。

(15) 許麗莉『『西学書目表』版本述略』(『圖書館雜誌』、第六期、二〇一八年、一一七頁〜一二二頁)を参照。

(16) 注(3)前掲書(第一集 論著一、一三一頁〜一八〇頁)を参照。

(17) 注(3)前掲書(『梁啓超全集・第一集 論著一』、一八十頁)「要之、舍西学而言中学者、其中学必為無用、舍中学而言西学者、其西学必為無本」を参照。

(18) 梁啓超『致徐佛蘇書』(注(3)前掲書、第十九集 函電一、四九八頁〜四九九頁)に「弟意欲批評日本各書籍、前此『新民』有『東籍月旦』一種、后未繼續、今可為之。……此書若可成、嘉惠学者不少。」とある。

(19) 注(3)前掲書(第三集 論著一、四六六頁)を参照。

- (20) 鈴木正弘「清末の中国人に紹介された日本の歴史書―梁啓超撰『東籍月旦』記事の考察―附『東籍月旦』叙論・歴史の部訳注稿」(『立正大学東洋史論集』第十五号、二〇〇三年、一八―一九頁)を引用。中国語の原文は注(3)前掲書(第三集 論著一、四六六頁―四六七頁)にあたる。
- (21) 山口るみ子は「梁啓超『東籍月旦』に見る西洋近代思想受容の態度と倫理思想」(『中国哲学文学学科紀要』、第五十七集第十二号、二〇〇四年)で梁啓超は「倫理学」に対する見解やその見解の源などについて考察してきた。
- (22) 鈴木正弘は注(20)前掲書で、梁啓超が「東籍月旦」に列举した歴史書に対して詳しい考察を行い、叙論・歴史の部の訳注をした。また、馬場将三は「梁啓超の『新史学』への過程」(『東洋大学大学院紀要』、三六、二〇〇〇年)で「東籍月旦」と梁啓超の『新史学』との関わりを論じ、「東籍月旦」に列举した歴史書の梁啓超の「中国史論」への影響を述べた。
- (23) 『学制百年史』(資料編)(文部省、一九七二年)を参照。
- (24) 梁啓超著、湯志鈞編「東籍月旦」(注(3)前掲書、第三集 論著三、四六八頁―四六九頁)に「中国自詡礼儀之邦、宜若倫理之学無所求於外、其实不然。中国所謂倫理者、其範圍甚狭、未足尽此学之蘊也。」とある。
- (25) 「中学校教授要目」(明治三十五年二月六日文部省訓令第2号)(『明治以降教育制度発達史』第四卷、文部省内教育史編纂会、昭和十三年、一九六―一九七頁)は以下のとおりである。
- 道徳ノ要領

自己ニ対スル責務  
 身体  
 健康 生命  
 精神  
 知 情 意 理想、趣味等  
 自立  
 職業 財産  
 人格  
 家族ニ対スル責務  
 父母 兄弟 姉妹 子女 夫婦 親族 祖先、家門 婢僕  
 社会ニ対スル責務  
 個人  
 他人ノ人格 他人ノ身体、財産、名譽、秘密、約束等 恩  
 誼 朋友 長幼、貴賤、主従等 女性  
 公衆  
 協同 社会ノ秩序 社会ノ進歩  
 所属団体  
 国家ニ対スル責務  
 団体  
 皇室  
 忠君 皇祖、皇宗 皇運  
 国家  
 国憲、国法 愛国 兵役 租税 教育 公権 国際  
 人類ニ対スル責務



万有ニ対スル責務

動物 天然物 真、善、美

(後略)

(26) 莊光茂樹は「梁啓超について―新文体と『東籬月旦』―」で『経済集志』(人文・自然科学編)、第五十三巻 別号一、一九八三年)で『東籬月旦』は中国の教育制度学校制度学術制度の参考になることも触れた。

(27) 孫墨「論晚清西学書目中『西学』内涵的演進」(『文献考論』、第五期、二〇一九年、一〇〇頁―一〇九頁)に梁啓超は目録学に対して、特に「西学」に対する見解が彼の政治主張に関わっていると指摘した。

(ちよう しゅくくん、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)

# **The construction of Liang Qichao's understanding of Western learning spreading to the East: An analysis focusing on *Dongji Yuedan***

Shujun ZHANG

**Key Words:** Liang Qichao, Western learning spreading to the East, *Dongji Yuedan*

From 1890, when he began to study with Kang Youwei, to the early years of his refuge in Japan, Liang Qichao composed a series of articles and books introducing foreign books for the benefit of his students and later scholars. This paper mainly focuses on three of his works: *Dushu Fenyue Kecheng*, *Western Culture Booklist*, and *Dongji Yuedan*. The background of their composition, contents, and other aspects are investigated to understand what Liang Qichao meant by Western learning and explore how he gradually constructed his understanding of Western learning spreading to the East and the leading factors of its construction.